

あめのにわ
京都雨庭計画 2025~

～水盆に支えられた古都を守り育む自然の恵み～

古都京都の地下に広がる巨大な水盆。
 水盆に溜まる豊富な地下水は古くから京都の生活・文化・伝統・産業・食を支えてきた。
 それは人類史以上の年月を経て形成された大地の恵みである。

いつしか京都は人が住むために地面を被覆し、水害対策の名のもとに河川を護岸で固めた。
 雨水たちの水盆への門戸は閉ざされ、地下水は奥深くに沈む。
 人工構造物による対症療法的な水害対策のみでは、近年の異常豪雨には太刀打ちできない。

都市に庭園技術「雨庭」を埋蔵してはどうだろうか。
 自然との共生は地下水を蓄え、しなやかにまち・ひと・伝統を守り、古都に彩りを与え
 未来の新しい文化を生み出す礎となっていく。

01. 水盆に支えられてきた京都の歴史

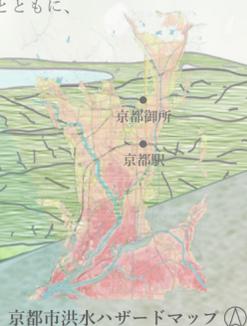
京都水盆は約 211 億トン（琵琶湖の約 80%）もの地下水を保有しており、溜まった地下水は急須のように男山と天王山の間のみから淀川へと流れ出る。この地下水は生活用水としてはもちろん、**伝統・文化・産業・食に至る幅広い範囲で利用され**京都の歴史を支えてきた。水盆は特有の地形・地層の条件が揃い形成された大地の恵みである。



地下水を利用した京都の伝統文化

02. 宅地化に伴う水害への脆弱化と地下水枯渇

近代以降、山林・農地の宅地化が急速に進んだことで地表面がアスファルトで覆われ、京都全域として保水能力の低下と雨水の地下浸透量の減少（＝雨水流出量の増加）が進んでいる。これにより地下水は減少し京都の伝統文化に大きく影響を与えうるとともに、河川氾濫の危険性が高まり人々の生活を脅かしている。
 本提案では、地下水涵養・水害対策を自然素材の機能を活かして行うとともに、自然環境を媒介とした新たな京都の未来都市像を提案する。

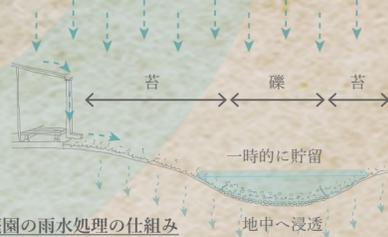


京都市洪水ハザードマップ

03. 庭園技術「雨庭」に学ぶ

自然素材の機能を活かした雨水処理

日本庭園では古くから、敷地内の雨水を草地や礫が敷き詰められた窪地に集水することで、自然素材の機能を活かし徐々に地中へと浸透させ、排水設備に頼らず雨水処理を行ってきた。この日本庭園の雨水処理方法を現代に応用する。



日本庭園の雨水処理の仕組み



京都水盆の雨水循環

05. 都市のインフラに生命を与え

京都雨庭化により育まれていく古都の新たな未来

無機質な都市インフラに生きた自然素材を挿入することで、自然を媒介とした人や生き物の新たな未来が創り出される。自然と古い街並みが掛け合える風景、植栽や菜園の手入れ等によるコミュニティの形成、生き物の居場所と新たな生態系の創出。
 そして、人・植物・建物・生き物・大地 etc... 生命が日々循環していく中で、京都水盆と蓄えられた地下水がこれからも京都を支え続け、新たな文化を生み出す礎となっていく。

04. 「溜め、遅らせ、沁みわたらせる」京都を守るオフグリッドな雨庭装置と雨水循環

水の浸透を遮断するような人工構造物に自然素材の治水浸透装置を挿入する。この装置は、「雨水を溜め」「水の流れを遅らせ」「水盆へと沁みわたらせる」機能を有する。これらを既存の都市インフラとも共存する形で京都全域に埋め込むことにより、各地で雨水をゆっくりと地中へと浸透させ、豪雨時の河川の急激な増水自体を防ぎ、日常的にゆっくりと淀川へと返していく。このような京都水盆を含めた雨水循環の仕組みを形成し、原因療法としてのオフグリッドな流域治水を行うとともに、地下水の涵養へと繋げていく。



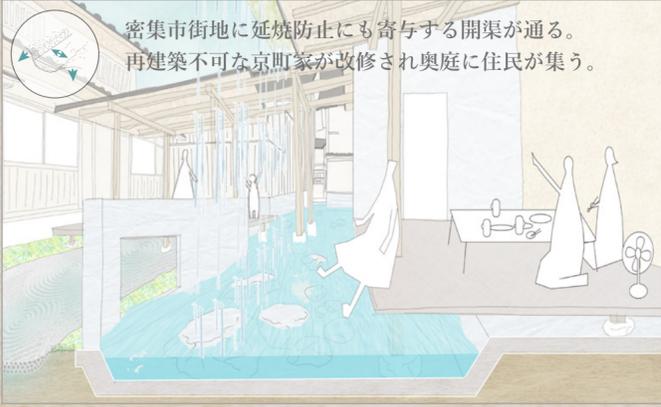
路地に礫の道が走る。雨天時に現れる水路が水害へのリテラシーを醸成する。自然を介して住民や観光客の会話が生まれる。



擁壁が雨水を利用した柵田式の植栽で彩られる。無機質なインフラに新たな生態系が育まれる。



アーケードに雨水を遅らせるピタゴラ機能を付与。自然と共生する繁華街の新たな風景。



密集市街地に延焼防止にも寄与する開渠が通る。再建築不可な京町家が改修され奥庭に住民が集う。



低未利用地を地域の菜園場に。蓄えられた井戸水を再生し地域のコミュニティを繋ぐ。